第Ⅰ部　基本構想







研究主題
エージェンシーを発揮して、変革を起こす力を持った生徒の育成
―メタ認知力を育成する指導と評価の探究―
（３か年研究最終年次）

Ⅰ　主題設定の理由について

(1)　本附属学校園における研究の方向性

愛媛大学は、大学憲章において「自ら学び、考え、実践する能力と次代を担う誇りをもつ人間性豊かな人材を社会に輩出することを最大の使命とする。」と謳っている。この使命を果たすべく、教育学部附属学校園では、「未来を拓く人材の育成」を共通主題として掲げ、研究実践を進めている。

今私たちが迎えている社会は、「VUCA」な時代だと言われている。「VUCA」とは volatility、uncertainty、complexity、ambiguity の頭文字を取った言葉であり、「予測困難で不確実、複雑で曖昧」を意味するものとして使われている。技術革新によるグローバル化や多様性の増大、国際的な不平等の拡大、人口の変化、環境の変化、資源の枯渇、生態系の不安定化、生物的多様性の喪失など、社会面・経済面・環境面において、私たちは多くの課題を抱えている。これらが複雑に絡み合い、今後の未来社会がどのように変化していくのかは、まさに予測困難である。これらの課題を改善していく方策や筋道について、既有の知識や経験が役に立たない可能性がある。誰かに指示されたことを遂行したり、決まった知識や技能を身に付けたりしているだけでは、状況をよりよく変えられないかもしれないのである。

したがって、「未来を拓く人材」とは、変革を起こすために、自分で目標を設定して取り組むとともに、その取組を振り返り、責任を持って粘り強く改善していく人材だと言うことができる。本校では、このような人材を育成するための研究・実践を積み重ねていく。その中で、発達段階の異なる子どもたちが在籍する他校園と連携し、系統性を見いだすことができれば、愛媛大学の目指す「豊かな創造性、人間性、社会性を備え、次代を担う自覚と誇りをもつ優れた人材」の育成につながるであろうと考える。

(2)　これまでの研究の成果と課題

本校では、前研究サイクルにおいて「持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成―既有の知識でつながる『深い学び』の創造を通して―」をテーマに、2019 年～2021 年の３年間研究を進めてきた。その成果を三つ挙げる。

一つ目は、既有の知識や経験を基にした学び合いを取り入れた学習指導の工夫により、以下に示す学びのポイントが得られたことである。

○　教科の本質について生徒に問うとともに、その問いに対する学びと振り返りを行うことで、教師と生徒が学びの目的や意義を共有しながら学習を進めることができる。
○　教科の学びと既有の知識を結び付けることで、生徒は実感を伴った学びができるようになる。生徒が学びを調整したり、成長を実感したりしていることは、学びの記録から見取ることができる。
○　個人の考えを持たせた上で、協働的な問題解決学習を行うことで、生徒は互いの考えを練り合ったり統合したりして、よりよい問題解決を行うことができる。

二つ目は、実践や価値の実感につなげる評価（パフォーマンス評価・OPPA 等）の工夫により、以下に示す学びのポイントが得られたことである。

○　社会や生活における課題を工夫して取り上げることで、生徒は目的意識を持って学習課題やパフォーマンス課題に取り組むことができる。
○　学習課題を設定する際には、教科の本質を見据えるとともに、小学校や高校での学びの系統性を理解しておくことが重要である。
○　OPPA では、単元構想の段階で指導と評価が一体となったものを設計することが重要である。それができていれば、生徒は学ぶ意義を感じながら、主体的に学習に取り組むことができる。

三つ目は、各教科における学習指導の工夫や評価の工夫を通して、以下に示す「持続可能な社会の実現に貢献する姿」（資料１）が見られたことである。

教　科	持続可能な社会の実現に貢献する姿
国　語	「思考」「認識」「コミュニケーション」の根幹をなす言葉の力を理解し、主体的に活用する生徒
社　会	社会や世界に向き合い、関わり合い、当事者意識を持って課題を主体的に追究・解決しようとする生徒
数　学	数学的な見方・考え方を働かせて問題発見・解決する過程を主体的に遂行し、それらを振り返って修正・改善する生徒
理　科	自然や人と主体的に関わり、理科の見方・考え方を働かせながら、科学的根拠に基づいて探究することのできる生徒
音　楽	一人一人が自分自身の力で多様な音楽を楽しむことのできる生徒
美　術	自己の考えや価値観を見つけ出し、深め、高めながらそれらを主体的に表現しようとする生徒
保健体育	運動やスポーツの楽しさや喜びを実感し、前向きに運動や健康の保持増進に取り組もうとする生徒
技　術 家　庭	〔技術〕　生活や社会で使われている技術に関心を持ち、生活の中の問題を見いだし、課題を設定し、その解決に向け、習得した知識や技能を生かそうとすることができる生徒 〔家庭〕　家庭や社会に関心を持ち、生活の中の問題を見いだし、課題を設定し、その解決に向け、習得した知識や技能を生かそうとすることができる生徒
英　語	社会や世界、他者と関わる中で、自分の気持ちや考えを主体的に表現し、伝え合うことができる生徒

資料１　各教科における中学校卒業段階の「持続可能な社会の実現に貢献する姿」

一方で、2021 年の学校評価の結果において「自己の成長を実感する授業」「自己効力感と感化する力」「自制心とやり抜く力」という三つの項目のポイントが、他の項目よりも低くなっていた。これらは全て「主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善」に関する評価項目であった。ここから、以下の三つの課題が見えてきた。

- 各教科の授業において、学びの変容や自己の成長を生徒自身が実感できる機会を増やすこと。
- 各教科の授業において、生徒同士が互いに影響を与え合う存在であることを実感できる機会を増やすこと。
- 各教科の授業において、生徒自身が現状を把握し、よりよい学びにするために調整したり、粘り強く取り組んだりする機会を増やすこと。

これらの成果と課題を踏まえて、３年サイクルの研究をスタートした。

⑶　研究推進について

「(1)　本附属学校園における研究の方向性」で、「『未来を拓く力』とは、変革を起こすために、自分で目標を設定して取り組むとともに、その取組を振り返り、責任を持って粘り強く改善していく力」と定義した。

OECD は、2015 年に「教育とスキルの未来：Education2030」（以下「Education2030 プロジェクト」と表記）をスタートした。その目的は、大きく二つあった。一つ目は、生徒が「VUCA」な未来を生き抜き、世界を形作っていくためには、どのような知識やスキル、態度及び価値観が必要であるかを明らかにすることである。二つ目は、教育システムはどのようにして、これらの知識やスキル、態度及び価値観を効果的に育成するかを明らかにすることである。この Edcation2030 プロジェクトでは、2030 年に求められるコンピテンシーとして「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」という三つが特に重要であると指摘されている。また、これらのコンピテンシーを学習する枠組みとして「ラーニング・コンパス」が示されている。

この「ラーニング・コンパス」は、生徒が単に決まりきった指導を受けたり、教師から方向性を提示されたりするだけでなく、未知の状況においても自分たちの進むべき方向性を見付け、自分たちを舵取りしていくための学習の必要性を説くものである。

この考え方は、まさに「未来を拓く力」の育成を目指す本校の研究と重なるものだと言える。また、生徒たちが「ラーニング・コンパス」を手に、自らが設定した課題を解決していく学びの中で、教師が意図的に「学びの変容や自己の成長を実感できる機会」「互いに影響を与え合う存在であることを実感できる機会」「現状を把握し、よりよい学びにするために調整したり、粘り強く取り組んだりする機会」設定することができれば、本校の課題を解決していくことができると考えた。したがって、Education2030 プロジェクトの考え方を研究の拠り所として研究を推進していくことにした。

⑷　目指す生徒の姿

「VUCA」な未来において、私たちが実現していきたい未来を能動的に創るためには、「エージェンシー」が必要だと言われている。Education2030 プロジェクトにおいて、エージェンシーとは、変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力と定義されている。誰かの行動の結果を受け止めることよりも、自分で行動すること。形作られるのを待つよりも、自分で形作ること。誰かが決めたり選んだりしたことを受け入れるよりも、自分で決定したり、選択したりすることである。しかし、それは単に個々人がやりたいことをやることではなく、むしろ他者との相互の関わり合いの中で、意思決定や行動を決めるものである。そうした他者や集団、社会との関係性があるからこそ、独りよがりな考えにならないようにしたり、自らの行動を律したりするなど、責任ある行動につながっていく。本校では、エージェンシーを短く分かりやすい言葉で「現状をよりよくする力」と定義している。今の自分の状況や集団の状況を把握し、見通しを持って行動し、責任を持って振り返り、自分や集団をよりよくしていく生徒を私たちは育てたいと考えている。

⑸　目指す教師の姿

エージェンシーとは、生徒だけが発揮するものではない。保護者や教師、コミュニティー、大学、附属学校園なども、それぞれがエージェンシーを発揮していかなければならない。特に、生徒と直に接する我々は教師エージェンシーを育成し、発揮していかなければならない。「VUCA」な時代にあっては、様々な課題が続々と登場してくる。したがって、生徒が単に決まりきった指導を受けたり、教師から方向性を示されたりするだけでなく、未知の状況においても自分たちの進むべき方向性を見付け、自分たちが舵取りしていく学習が必要である。このような学びを実現するためには、生徒がエージェンシーを育んだり、発揮したりする場面を意図的に設定していくことが大切であり、教師がこれまでの授業観や指導観を大きくアップデートしていかなければならない。

授業観を見直すというのは、「主体的・対話的で深い学び」が授業改善の視点として示された現行の指導要領でも謳われていることである。2017 年、2018 年の学習指導要領改訂の方向性を示した中央教育審議会答申では、「これから子供たちが活躍する未来で一人一人に求められるのは、解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続きを効率的にこなしたりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことであると考えられる。そのために必要な力を、子供たち一人一人が学ぶことで身に付け、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。」とある。このことからも、従来のような教師主導の授業だけでなく、学習課題の設定や学習方略の決定を生徒が意思決定するとともに、生徒自身が学びを調整していけるような授業へと改善していくことが求められていることが分かる。

⑹　研究主題の表現について

本校がこれまで研究実践を重ねてきた成果と課題、これから本校が目指すもの、学習指導要領が目指すもの、更にはこれからの社会に求められるものを総合的に踏まえ、研究主題を「エージェンシーを発揮して、変革を起こす力を持った生徒の育成」とした。前述したように、Education2030 プロジェクトにおいて、エージェンシーは「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」であると定義されている。各教科の授業の中で、生徒がエージェンシーを発揮することができるよう、学校での学び、自己の学びをよりよいものへと発展させたいと考える。また、生徒たちが日々の学びで生み出す小さな「変化」の連続を大きな「変革」につなげていくことで、次世代をたくましく切り拓くリーダーとして成長してほしいという強い願いから、研究主題の中に「変革を起こす」という言葉を用いた。

2　研究の変遷

(1)　1年次研究について

「生徒の学ぶ力を高めるための指導と評価の工夫」を副主題と設定し、研究実践に取り組んだ。

ア　1年次研究の内容

（ア）生徒が学ぶ力を高めるための指導について

生徒自身が学習の主体者として学ぶ力を高めることができるよう、各教科でAARサイクルを用いた学習過程の実施に取り組んだ。AARサイクルとは、Anticipation—Action—Reflectionの頭文字を取ったもので、「見通し、行動、振り返り」を表している。学習者が見通しを持って計画し、実際に学び、責任を持って振り返り、その振り返りを次の見通しにつなげていくという学びのプロセスのことである。Plan—Do—Check—Actionの頭文字を取ったPDCAサイクルという概念もあり、指している内容もよく似ている。ただし、このサイクルは組織や集団のマネジメントで使われる概念であるため、教育の文脈におけるPDCAサイクルは教師を主体とした考え方であると言える。一方で、AARサイクルは学習者を主体としたサイクルであるため、私たちは分けて考えている。なぜAARサイクルが重要であるかと言うと、エージェンシーの概念の根底にある当事者意識や責任感を醸成していく上で、このプロセスが必要だからである。自ら見通しを持ち、行動し、振り返ることで、学習者は必然的に課題やテーマを自分ごととして捉え、当事者意識を持つことができるようになる。当事者意識を持つと、責任ある行動や判断にもつながっていくはずである。教師が設定したカリキュラムを生徒がただ受動的に学んでいくだけでなく、一人一人が当事者意識を持って学んでいくことを重視した。

（イ）生徒が学ぶ力を高めるための評価について

生徒の学ぶ力を高めるための評価として、OPPシートを用いた評価活動に取り組んだ。前研究サイクルにおいて、「何を学ばせるのか」「どのように学ばせるのか」ということを教師が熟考した上で、単元構想・指導・評価まで見通したOPPシートを作成し、書かせてきた。その研究を更に進め、学習者自身が授業や単元での学びを振り返ったり、学びの調整や変容を自ら実感させたりするために、OPPシートを工夫・改善して用いることにした。

イ　1年次研究の計画・実践

時　期	内　　容
2022年　4月	○　職員会にて研究基本構想・研究の方向性の説明、研究計画、研究グループの提案
2022年　5月	○　研究基本構想を基に、各教科が研究計画書を作成・提案
2022年　7月	○　第1回校内授業研究会（国語、特別活動）の実施
2022年　8月	○　「エージェンシー」に関する校内研修の実施 ※　白井俊（内閣府参事官）によるオンライン講演
2022年 10月	○　第2回校内授業研究会（社会、数学、理科、美術、保健体育、英語、道徳）の実施
2023年　2月	○　第3回校内授業研究会（国語、社会、数学、理科、音楽、保健体育、技術、家庭、英語）の実施
2023年　3年	○　1年次研究の振り返り

ウ　１年次研究の成果と課題

（ア）生徒が学ぶ力を高めるための指導について

○　教科で AAR サイクルの研究実践を進めていく中で、「学習目標の設定」「学習方略の決定」「学習を調整する機会の確保」など、生徒に委ねる場面を意図的に設定しながら、授業を進めることができるようになってきた。中には、単元全体を探究活動として構成し、主体的に教科の資質・能力を高めさせるというダイナミックな実践を行う教科も出てきた。

○　課題との出合わせ方を工夫し、自分の教科における「よりよい問いとは何か」について生徒と共に考えることができた。生徒自身が問いを見いだしていく中で、授業の主体者としての意識が高まった。

●　生徒に委ねる場面を設けることは、生徒がエージェンシーを発揮したり、自ら学ぶ力を高めたりするために大切であるが、現状を把握したり修正したりする能力を高めなければ、課題解決の方向がずれてしまい、想定よりも多く時間がかかってしまう。

（イ）生徒が学ぶ力を高めるための評価について

○　その単元における生徒の学びの調整や変容が見られればと思い実践を始めた。その結果、年間を通じて OPP シートでの振り返りを行う中で、教師の想定を越え、以前の単元での学びをつなげて比較したり、変化を指摘したりする生徒も出てきた。

○　振り返りによる自己評価を継続することにより、この教科において、自分は何を学べばよいのか、何を目指せばよいのか、何を身に付ければよいのかを自覚することにつながった。

●　ただ「書きなさい」では、内容理解の振り返りに終わる。質の高い振り返りにしていくためには、教師による適切な視点設定やフィードバックが必要である。

⑵　２年次研究について

「メタ認知力を育成する指導と評価の在り方」を副主題と設定し、研究実践に取り組んだ。１年次研究で課題として出てきているように、生徒が自ら AAR サイクルを回すためには「現状を把握したり修正したりする能力」が必要であることが確認された。このことを踏まえて２年次研究では、「メタ認知力」に着目して研究を深めていくことになった。メタ認知力とは、自らの学習について自覚（モニタリング）し、調整（コントロール）していく能力のことである。

メタ認知力を高めることで、自らの知識やスキル、態度及び価値観を、どれだけ身に付けているか、あるいはそれをどのように活用しているかといった状況を認識できるようになる。また、こうした状況を認識することによって、自らの能力を様々な場面に適用することができるようになる。

ア　２年次研究の内容

（ア）メタ認知力を育成する指導の工夫について

メタ認知力を育成するために、三つの視点を設定し、各教科の中での実践を試みた。

①　目標の設定と自己調整

生徒自身に目標を設定させ、それを達成するための努力を促す。また、その目標と照らし合わせて、自分自身の現状や進歩を把握させる。

② 問題解決プロセスの意識化

生徒自身に「課題や問題を分析する」「適切な方略を選ぶ」「解決策を実行する」といったステップを意識させる。

③ 自己調整型の学習の導入

教師に決められたプロセスで学ぶだけでなく、生徒が自己決定したり、自己選択したりしながら、学びを調整できるよう授業をデザインする。

(イ) メタ認知力を育成する評価の在り方について

授業や学習の終わりに、学習者に振り返りの機会を与える。自分の学びや成果、課題を振り返ることで、メタ認知力を高めさせる。１年次研究から実践しているOPPシートの研究を継続する形となる。ただし、課題となった「視点を設定すること」「適切なフィードバック」については改善しながら行っていくことにした。

イ　２年次研究の計画・実践

時　期	内　　容
2023年　4月	○　職員会議にて２年次研究の方向性の説明、研究計画、研究グループの提案
2023年　5月	○　研究基本構想を基に、各教科が研究計画書を作成・提案 ○　若年教員授業研究会（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、技術、家庭、体育、英語）の実施
2023年　7月	○　第１回校内授業研究会（国語、社会、理科、音楽、英語）の実施
2023年　10月	○　第２回校内授業研究会（国語、社会、数学、理科、美術、保健体育、技術、家庭、英語）の実施
2024年　2月	○　第３回校内授業研究会（国語、社会、数学、理科、保健体育、英語）の実施
2024年　3年	○　２年次研究の振り返り

ウ　２年次研究の成果と課題

（ア）メタ認知力を育成する指導の工夫について

○　単元の最初に、その単元を通して生徒自身が身に付けたい力を考えさせた。各授業の中で、最初に設定した身に付けたい力と今の自分を比較させる中で、現状を把握するとともに、足りない部分を補えるように学びを修正する姿が見られた。メタ認知力を育む上で有効であった。

○　自己調整型の学習に挑戦することで、生徒が自己選択、自己決定する場面を設定することができた。生徒自身が責任を持って選択・決定していくことで、責任を持って自分の学びを進めたり、修正したりすることができるようになった。

○　題材・教材との出合わせ方を工夫することで、課題解決の道筋を生徒自身が考えることができた。また、計画どおりにいかない場合に、生徒同士で情報共有や意見交換をさせることで、学びを調整したり、計画を修正したりしながら、授業に取り組む姿を見ることができた。

●　単元を通して身に付けさせたい力を単元前に把握させることが難しかった。

●　各教科の実践を集約して、どのような工夫に効果があったかを共有し、指導法を確立していく必要がある。

（イ）メタ認知力を育成する評価の在り方について

○　デジタル版の OPP シートを作成し、活用する教科が増えた。このことにより、生徒の手元にも教師の手元にも作品が残るため、生徒の学びや変容を随時把握しやすくなった。
○　「学習課題や課題解決の見通し」「学び」「振り返り」が、授業ごとや単元ごとに振り返ることができる内容になっており、教科ごとの工夫が見られるものになってきている。
●　指導の工夫と同様、評価の工夫によって、生徒の学びの変化を見取る方法を検討しなければならない。

⑶　３年次研究

「メタ認知力を育成する指導と評価の探究」を副主題に設定し、研究実践に取り組んだ。メタ認知力の研究を継続することにしたのは、エージェンシーを発揮する上で、現状を把握（モニタリング）し、調整（コントロール）する能力が必要だからである。また、「探究」という言葉で締めくくったのは、昨年度の研究成果を更に発展させたいという思いからである。

ア　３年次研究の内容

（ア）メタ認知力を育成する指導の工夫について

２年次研究の実践と振り返りを踏まえて、メタ認知力を育むための視点を以下の三つに整理した。

①　メタ認知の重要性の理解促進
　自分の現状を客観的に把握したり、意識的に調整したりすることの大切さを生徒自身に理解させる。
②　問題解決プロセスの意識化
　生徒自身に「課題や問題を分析する」「適切な方略を選ぶ」「解決策を実行する」といったステップを意識させる。
③　自己調整型の学習の工夫・改善
　生徒自身が自己決定したり自己選択したりしながら、学びを調整できるよう、前年度の反省を踏まえて授業をデザインする。

一つ目の視点は、「メタ認知の重要性の理解促進」である。２年次研究を通して、自分の学びを客観的に振り返ることの大切さや、自分の変容を客観的に捉えることの大切さを知ることで、生徒自身が意識して、学びや変容を捉え、修正しようとする姿を確認することができた。したがって、具体的な学習場面を取り上げ、自分の現状を客観的に把握したり、意識的に調整したりすることの重要性を理解させた上で、各教科の学習に取り組ませることにした。

二つ目の視点は、「問題解決プロセスの意識化」である。これは、２年次と同じである。自己の学びを客観的に振り返らせたり、自己の変容を客観的に捉えさせたりするためには、結果ではなく過程に目を向けさせる指導が大切であるため、継続することにした。

三つ目の視点は、「自己調整型の学習の工夫・改善」である。２年次は、「自己調整型の学習の導入」というチャレンジを促す表記であったが、そこから一歩進め、生徒が自己決定・自己選択する場面を意図的に設定することを目指した。

（イ）メタ認知力を育成する評価の工夫について

評価には、「学習の評価」「学習のための評価」「学習としての評価」という三つの捉え方がある。中島雅子のレポート（2019）を基に、評価の捉え方を改めた（資料２）。

アプローチ	目　的	準拠点	主な評価者
学習の評価 （Assessment of Learning）	成績認定、進級、進学などのための判定（評定）	他の学習者、教師や学校が設置した目標	教　師
学習のための評価 （Assessment for Learning）	教師の教育活動に関する意思決定のための情報収集、それに基づく指導改善	学校や教師が設定した目標	教　師
学習としての評価 （Assessment as Learning）	自己の学習のモニタリング及び自己修正や自己調整	学習者個々人が設定した目標や、学校・教師が設定した目標	学習者

資料２　中島（2019）における評価の捉え方

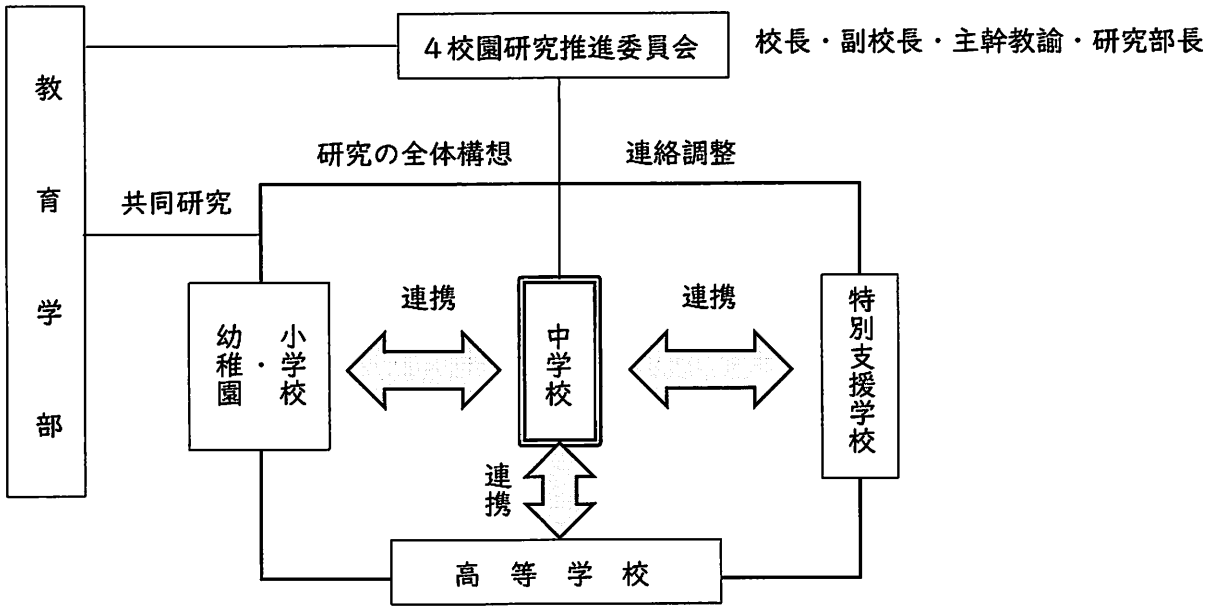
資料２から分かるように、メタ認知力を育成する評価としては、学習者自身が自己の学習のモニタリングや自己調整を行う「学習としての評価」という考えがふさわしいことが分かる。１年次・２年次の研究においても、OPP シートを活用して自己評価に取り組ませてきた。ただし、その目的は曖昧で「学習の評価」や「学習のための評価」として活用してきた面もある。３年次研究としては、「学習としての評価」という考えを共有し、学習者が自分の学びを客観的に振り返り、調整するために OPP シートを工夫・改善して用いることにした。

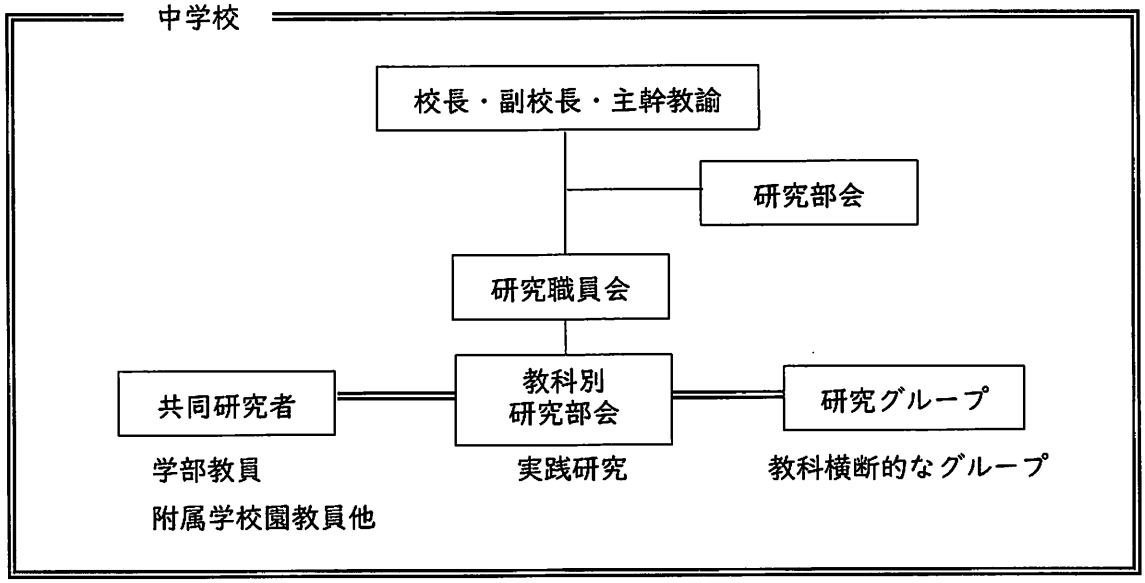
イ　３年次研究の計画

時　期	内　容
2024 年　４月	○　職員会にて３年次研究の方向性の説明、研究計画、研究グループの提案
2024 年　５月	○　研究基本構想を基に、各教科が研究計画書を作成・提案 ○　若年教員研修会（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、技術、家庭、保健体育、英語）の実施
2024 年　６月	○　職員会にて評価質問紙研修①（理解促進）の実施
2024 年　７月	○　第１回校内授業研究会（国語、音楽、英語）の実施 ○　職員会にて評価質問紙研修②（結果分析、共有）の実施
2024 年　９月	○　第２回校内授業研究会（国語、社会、数学、理科、英語）の実施
2024 年　10 月 ～11 月	○　必要に応じて研究授業を実施し、紀要を執筆
2025 年　２月	○　第 101 回愛媛教育研究大会（国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術、家庭、英語）の開催
2025 年　３年	○　３年間の研究の振り返り

3　研究組織

各教科領域を基盤として各個人が研究実践を進めていくに当たっては、本附属学校園や大学教員等との共同研究を進めることにより、研究実践の客観性を高め、質の向上を図った。さらに、校内での教科横断的な研究グループを組織し、全教員が研究主題等への共通理解を図りながら研究ができる体制を整えた。





参考文献

・白井俊（2020）「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」ミネルヴァ書房
・溝上慎一（2020）「社会に生きる個性―自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー―」東信堂
・三宮真智子（2022）「メタ認知　―あなたの頭はもっとよくなる―」中公新書ラクレ
・中島雅子(2019)「理科教育における授業改善のための教師の自己評価―OPPA 論を中心として―」理科教育学研究 Vol.59 No.3